2013.11.20／第32号　Free Paper ●UU now●　無料配布／2万4千部発行

UU now ユー・ユー・ナウ

台湾と日本をつなぐ チャレンジ！

OB.OG. INTERVIEW

公益財団法人交流協会台北事務所
専門調査員

阿部 久美子
Kumiko ABE

CONTENTS

1 OB. OG. INTERVIEW
4 特集「キャリア教育・就職支援センター」
6 地域貢献REPORT
8 Welcome to 授業
9 Welcome to 研究室＆ゼミ
10 研究keyword / 私の学生時代
12 宇大生は今!
14 UU News
15 INFORMATION

台湾と日本をつなぐ チャレンジ！

公益財団法人交流協会台北事務所
専門調査員
Kumiko ABE
阿部 久美子

書道の手本とした中国の古い石碑に刻まれた文字。カボチャの種をよく食べていた幼なじみの華僑の子との交流。少女時代、異国への思いを募らせた。宇都宮大学国際学部の1期生。初の交換留学生として中国・上海の大学で学んだ。卒業後、台湾の大学へ語学留学。以来、主に台湾を拠点に台湾と日本をつなぐ仕事を続けてきた。この10月、国交のない台湾で日本大使館のような役割を担う公益財団法人交流協会台北事務所の専門調査員として台湾の日本研究を支援する仕事に就いた。

（取材協力：企画広報課学生スタッフ／渡邉里奈）

■組織的な日本研究を定着化させる

阿部さんが修士を取得した国立政治大学は、台湾初の「現代日本研究センター」が設立されるなど台湾の日本研究の拠点。国際関係研究の成果を日本に発信するため同大学が発行している学術誌『問題と研究』の編集を、この8月まで担当していた。

「欧米研究に比べ日本を研究している人たちの活躍する場が少ない」「日本統治時代を経験している知日派が高齢化している」「過去の政治的背景から社会科学系の研究が軽視されてきた」と、「日本研究支援」の必要性を語る。

「ここ数年、日本を研究する人たちの活躍の場を広げ、学術的に日本のことをもっと知ってもらおうという動きが出てきている」という。政治大学の大学院に日本研究のコースができ、8つの大学に日本研究のセンターが設立されている。この秋には、日本研究の博士課程が設立される見通しだ。

阿部さんは交流協会のスタッフとして大学の日本研究のカリキュラムやシンポジウムなどを側面から支援する役目を担う。「日本研究の基盤整備の動きを通して台湾に組織的な日本研究をいかに定着化させ、さらに発展させていくかが、これからの課題です」

■海外体験が物おじしない度胸とチャレンジ精神を育む

「世界のことを知りたい」との思いで設立されたばかりの国際学部に入学。初めての交換留学生として上海の復旦大学に向かう際は、「ある意味、実験台という思いがありました」と笑う。学部の先輩は誰ひとりいない。何もかもが初めてづくし、手探りの学生生活だった。「先生たちも模索中だったと思いますが熱心に指導してくださいました。学生と先生の距離がとても近かった」と当時を振り返る。留学壮行会には、クラスメートとともに多くの先生たちが参加してくれたことを、いまも鮮明に記憶している。

学生時代はいろいろな国を旅した。特に、中国にこだわっていたわけではない。「復旦大学への留学が再び中華圏にフォーカスされていくきっかけになりました。原点に戻された感じです」

卒業後は中国語をマスターするため再び留学することを心に決めた。周囲からは「そんな非現実的な」と言われ続けた。クラスメートが就職活動している中で、留学資金を確保するため「奨学金活動」に追われた。「少しは就職活動をしたのですが、やはり、自分は中国語圏に行きたかった。『就職がうまく行かなかったら留学を考えては』という人もいました。でも、自分がやりたいことがはっきりしているのに、それを後回しにして2番目（就職活動）のことを先にやるということは、どうしてもできませんでした」

宇大生時代の阿部さん（前列右から2番目）。上海留学当日の朝、見送りにきたクラスメートと

台北市「幸せな家庭を築こう」街頭ウォークに参加して（写真左から2人目）

台湾国立政治大学修士（MBA）卒業式（写真中央）

指導教員に「中国語圏に行くのであれば、台湾は学術的にオープンだからいろいろ学ぶ機会が多い。台湾も考えてみれば」とアドバイスされ、最終的に台湾への語学留学を決断した。

「大学時代にバックパッカーでいろいろな国に行きました。そこで予想外のことに出くわしましたし、たいへんな思いもしました。その経験が、物おじしない度胸や新しいことにチャレンジする精神を培ってくれたのかもしれません」

■台湾と日本をつなぐ

「台湾は、不思議なほど親日」という。高齢化した先住民族が住む山奥に向かう医療チームに通訳ボランティアとして同行した際、10を超える先住民族の公用語として日本語が使われている現実に驚いた。それぞれの先住民族が別の言語を使っているため互いにコミュニケーションがとりづらく、日本統治時代に日本語が共通語としての役割を果たすようになった。

台湾に生活拠点を移して9年。エネルギッシュでオープンな国民性を肌で感じてきた。「私自身、半分は『台湾化』しています。元気というところで魅かれるのですが、常にテンションが高い状態なので、日本に帰ってくると落ち着くし、和みます」と微笑む。

「台湾に住んで、知れば知るほど日本との違いが見えてきました。確かに親日ですが、文化も、考え方も違う。台湾と日本をどれだけつなげていけるか、私にとってチャレンジだと思います」

企画広報課学生スタッフの渡邉さんと。取材後、東京の上野公園にて

■阿部 久美子【あべ くみこ】

1995年、宇都宮大学国際学部国際社会学科入学。96～97年、復旦大学(中国／上海)交換留学。99年、宇都宮大学卒業。99～00年、国立政治大学（台湾／台北）華語文教学中心中国語専攻。00～01年、台湾・現地法人設立準備スタッフ。02～06年、台湾貿易センター東京事務所（中華民国対外貿易発展協会、TAITRA）プロジェクトマネージャー。06年、国立政治大学商学院企業管理研究所（台北）入学。09年、国立政治大学卒業。経営学（MBA）修士取得。09～13年、台湾・台北国立政治大学国際関係研究センター学術専門誌『問題と研究』（日本語版）マネージメント・編集。13年10月～公益財団法人交流協会台北事務所専門調査員。

【取材・文：アートセンターサカモト 栃木文化社 ビオス編集室／写真撮影：木原悠策】

特集 宇都宮大学 キャリア教育・就職支援センター

http://www.career.utsunomiya-u.ac.jp

4年一貫のキャリア教育と手厚い就職支援

「キャリア教育・就職支援センター」の役割について、副センター長の末廣啓子教授にお話を伺いました。

Q いま、キャリア教育の必要性が高まっています。どういう背景があるのでしょう。

グローバルな時代の中で雇用環境や働き方・働かせ方が大きく変わり、働く選択肢は多様化しています。でも、こうした現実が学生たちに充分伝わっていない側面があります。働くということをきちんと理解し、自分の人生を自分らしく生きるためにはどういう道筋で何をすればいいのか選択する力をつける必要があります。そこに、キャリア教育が求められる理由があります。

Q 宇都宮大学のキャリア形成支援の特徴について聞かせてください。

まず一つは、4年一貫のキャリア教育です。入学式後のガイダンスで、学生と保護者に将来を見据えた学生生活を過ごすことについて話をすることから始まります。全学科で開講される新入生セミナーでは初期導入キャリア教育の授業を全員が受講します。

基盤教育として専任教員や企業人など外部講師による「キャリア教育科目」が実施され、専門教育の中でも専門学問と社会、自分の生き方との関わりを理解することを目指します。授業の他に、キャリアフェスティバルという大きなイベントも特徴です。

また、キャリア教育と一体化した手厚い就職支援も特徴の一つです。多様な就職ガイダンス・セミナーを頻繁に開催し、個別相談体制も充実しています。特に、未内定者に対して3年前からキャリアセンターの職員が一人ひとりにアプローチし相談に乗り、企業の紹介なども行ってきました。

こうした手厚いフォローが、本学の高い就職率につながっているのではないかと思います。国際的な金融危機を引き起こしたリーマンショック以降も、本学学生の就職率は早い段階で高水準に回復しました。今年3月に卒業した学生についても95％と高い就職率になっています。

Q キャリア教育の基本的な考え方を教えてください。

キャリア教育では、広い視野、主体性、起業家精神、チャレンジ精神を身につけてもらうことを目指しています。自分が生きている社会に関心を持ち、働き方等の実態を正しく理解するとともに、いろいろな人の人生にふれ、働き方や働く人の思いを理解することを基本に、そこから、自分を知り、感じ、考えていくことを大事にしたいと思っています。

Q 特色ある授業が行われていますね。

すべてのキャリア教育授業を紹介した冊子『将来の進路を考え今何を学ぶべきか』を作成して全学生、教員に配布し、1年生からの計画的な履修を呼びかけています。フリーターにインタビューして働くことの意味を問い直すユニークな授業や留学生のプログラムも提供しています。

今年から宇都宮市と連携して実施する「起業の実際と理論」の授業は起業家精神を養ってもらうことが目的ですが、たくさんの学生が受講しています。授業は、すごく活気があり、自分で何かやりたいという学生が増えてきていることを感じています。

キャリア教育・就職支援センターによるサポート

■ 進路相談室（1～4年生、大学院生）
キャリアアドバイザーに毎日相談できる体制が整っています。

■ 全学プログラム行事（1～4年生、大学院生）
1・2年生のうちからキャリアや就職について考え、体験してもらうために、全学生を対象に「キャリアフェスティバル」「学生支援プロジェクト」等を行っています。

■ インターンシップ（2～4年生、大学院生）
企業や官公庁など、実際の職場で仕事を体験します。社員と同じような分野で働く中で、企業・仕事・働くことを理解するものです。

■ 就職情報の提供（1～4年生、大学院生）
求人・セミナー情報をはじめ、業界本などの就職関連図書・雑誌などを自由に閲覧することができます。設置してあるパソコンを使っての適職発見や企業情報の検索もできます。

■ 就職ガイダンス・セミナー（3、4年生、大学院生）
具体的な就職活動に向けて、ガイダンス、セミナーを実施しています。
主なプログラム『これから始まる就職活動』『業界・企業・職種研究法』『ビジネスマナー講座』『就職面接実践講座』『教員採用対策セミナー』『筆記試験対策講座』『職務適性テスト』『就職支援バスツアー』等

キャリア教育授業

1、2年生のうちから社会の状況に目を向けるとともに、自分や自分らしい生き方について考え、学生生活の目標を立て具体的な進路・職業選択ができる目を養います。

■「人間と社会」
労働市場、企業、人々の働き方を理解し、働くことの意味を考える。

■「キャリアデザイン」
インタビューとグループワーク、演習、ゲストの話を通じて、自分について知り、社会との関わりを考え、自らのキャリアをデザインするための材料ときっかけを得る。

■「企業のグローバル戦略とキャリア形成」
企業（特にIBM）のグローバル戦略に関する学びを通して、自らのキャリア形成を企業の現役の人事パーソンとともに考える。

他「起業の実際と理論」、「より良く生きる」、「働くことの意味と実際」、などがあります。

センターを積極的に利用して内定を勝ちとった学生の声

◆内定先：食品製造業
農学研究科2年　大橋 大

就職活動が始まる直前、キャリアフェスティバルに参加し、内定先の企業と出会いました。センターが企画した同社の工場見学にも参加し、仕事に強く惹かれました。学部時代にキャリア教育科目を受講しましたが、企業研究の仕方、意義を学ぶことができ就職活動に生かされました。

◆内定先：建設業
工学研究科2年　星山 仁篤

学部時代にキャリア教育科目を受講しました。工学部で企画されたOBによる説明会に行ったことが就職活動を始めるきっかけとなりました。最終的には研究室の現場見学に行ったことが縁で、セネコンから内定をいただきました。

◆内定先：国家公務員
教育学部4年　碓井 久美子

就職活動を控え、自分の進路に迷っていた3年生の前期、「何かが変わるかも。何かを発見するかもしれない」という思いでキャリア教育科目を受講しました。その年の12月、学内で開催された合同公務員説明会に参加したのをきっかけに公務員を目指そうと決め、勉強と苦手だった面接もセンターで練習を重ね、合格しました。

◆内定先：旅行業
国際学部4年　平野 あやか

就職活動が不安で、センターの方に相談に乗っていただきました。OB、OGの方を紹介していただき、そこで内定先の先輩と知り合うことができました。センターを通して、同業他社がたくさんある企業の中で内定先を絞るきっかけをいただきました。キャリアカフェに通い、カフェにある豊富な就職本にも助けられました。

キャリアカフェの紹介

就職関連の資料の閲覧と学生相互の情報交換ができる学生の「たまり場」です。

●あるもの　●できること
- 就職活動に役立つ書籍等
- 公務員・教員の試験対策本
- 日経新聞・経済雑誌
- コーヒーマシン
- パソコンが自由に使える
- 職業興味診断(キャリアインサイト)の利用
- 昼休みを利用したミニオープンセミナー

学生による学生のための就職支援

JUST（宇大就職活動応援団）
後輩のために就職支援イベントなどを企画・実施する内定者の団体（平成20年度結成）です。就活の経験を後輩へ伝え、相談にも応じる、就活生の心強い味方です。

WILL（就活サポートチーム）
就活生を支援することを目的とした1、2年生の団体(平成25年度結成)です。就活生の支援だけではなく、低学年から将来の「キャリア形成」を意識していく一翼を担ってくれる存在として期待されています。

宇大の一大イベント紹介

キャリアフェスティバル

キャリアフェスティバルは、宇都宮大学独自のイベントです。全学年を対象とした一大イベントで、キャリア教育の一環として業界を代表する企業約10社を招いて、パネルディスカッション、分科会を行います。産業界や企業が不透明なグローバル社会の中でどのような経営戦略の下に進もうとしているのか、どのような人材を求めているのかなど、今後の学生の将来を取り巻く環境や業界・企業の動向・考え方を学ぶ機会を提供しています。

今年の開催：11月9日(土)12：30～
会場：第一体育館ほか
＊参加企業
オリエンタルランド、資生堂、本田技研工業、東芝メディカルシステムズ　他6社

学内合同企業・公務員説明会

就職活動を迎えた学生を対象に、約160社の企業、約20の機関を一同に集め、ブース形式で、企業や公務員の個別説明が行われます。文系・理系問わず多くの募集職種があり、さまざまな企業や職種と出会える機会を提供しています。

今年の開催：12月9日(月)～13日(金)

宇都宮大学 地域貢献 REPORT

宇都宮大学 地（知）の拠点整備事業

平成26年度から「とちぎ高齢者共生社会を支える異世代との協働による人材育成」が始まります

宇都宮大学の「とちぎ高齢者共生社会を支える異世代との協働による人材育成」が、このたび文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（大学ＣＯＣ事業）」に採択されました。

この事業はどんなものなのか、また学生はどんなことを学ぶのかなどについて、前号に引き続き「地域連携教育研究センター」の廣瀬隆人教授に話をしていただきました。

―「地（知）の拠点整備事業」とは、どんなものなのですか。

「地（知）の拠点整備事業（＝大学ＣＯＣ（Center of Community）事業）」とは、文部科学省が平成25年度から新たに開始した事業です。

この事業は、大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を支援することで、課題解決に資するさまざまな人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としたものです。

今年度は、全国の大学等から３１９件の申請があり、最終的に52件の事業が選定されました。栃木県内では宇都宮大学が唯一です。

なお、この事業に対して文部科学省から補助を受けられる期間は、最長５年間（平成29年度まで）ですが、補助期間が終わってもこの事業は継続していくこととしています。

―大学が、これまで以上に地域の課題解決のための拠点となるための事業ということですね。では、「地域の課題」は、どのようにして決めたのでしょうか。

宇都宮大学は、これまでも地域との連携を積極的に推進してきたわけですが、今回の「地（知）の拠点整備事業」に申請するに当たっては、栃木県や宇都宮市の職員の方も参加いただいたワーキンググループを複数回開催し、さまざまな面から検討をしました。

当初は、栃木県の地域課題は何か、それは２０１２年に栃木県が調査した地域課題があり、その中で県民が最も大きな課題だと感じていたのが「高齢社会」についてでした。

この課題は何も栃木県の固有の課題ではなく、日本の課題でもあるのです。したがって、学生が高齢社会について学び、超高齢社会の問題について地域に貢献することを内容とした「高齢者と異世代との共生、協働」という観点から事業の内容を組み立てることとしました。そのことによって、全国のモデルケースとなるものと考えています。

―それでは、この事業の特徴、ポイント等について、わかりやすく説明をお願いします。

１つめとして、全学生に向けた「異世代Chain教育」を行います。

異世代との対話や協働を学ぶ場として「とちぎ終章学総論」を開設し、これを全学必修とします。授業は、アクティブラーニングの手法で展開し、学生は、栃木県のリアルな各種のデータの現状分析、高齢者と対話する中で丁寧にコミュニケートできる実践的でリアルなスキル、課題解決のための方策立案などを学びます。また、副専攻プログラム「高齢共生社会」を実施し、これまで以上に高齢社会を支える人材を育成します。

２つめは、「終章コミュニティワーカー」を養成します。

こちらは、シニア世代や高齢者の支援に携わるさまざまな社会人を対象に講座を開設し、高齢者とともにコミュニティを形成する人材を養成します。履修条件を満たした者には履修証明書を交付し、宇都宮大学が「終章コミュニティワーカー」として認証します。平成29年度末までに40名程度まで輩出する予定です。

３つめは、学士課程カリキュラムの全学的な改革を行います。

１つめと関連しますが、具体的には基盤教育のリテラシー科目を組み替えて、「とちぎ終章学総論」を含む21世紀リテラシーとして再構成を行います。また、基盤教育すべての教養科目を「テーマ別教養」として再構成します。専門教育を含め、全学の履修区分の整理、緩和等も行う予定です。

新たなこれらの取り組みを実現するには、宇都宮大学だけではできません。栃木県、宇都宮市、下野新聞社、県内の諸団体の力を借りて一緒に取り組んでいきます。

―学生の側からすると、より深く、そして実践的に、高齢社会について学ぶことになるわけですね。「終章」についてもう少し、説明してください。

宇都宮大学は、下野新聞社と２０１２年６月から全６回にわたる連携セミナー「終章を生きる」を展開してきました。おかげさまで、セミナーは大変好評で、反響も多く、豊かな「終章」とは何か、またその実現に向けて何をするべきかを多くの受講者とともに考えていくことができました。これが今回の事業を展開することとなった最初の一歩ともいえます。

学生にとって、「高齢社会」や、「終章（人生の最期）」など、まだまだ遠い未来のことであって、自分には関係ないと感じている人がほとんどではないかと思います。

しかしながら、いわゆる「２０２５年問題」といわれる65歳以上の高齢者が国の総人口の30％を超える超高齢社会は確実にやってきます。この事業をとおして、高齢者との共生そして協働について、自分の問題としてとらえてもらいたいと思っています。

―では、授業はいつから始まるのですか？

今年度は、事業を展開するための準備期間になります。まずは「終章学センター」を地域連携教育研究センターの中に設置します。この事業を学生や地域の方々に広く知っていただくためのイベントも計画しています。

授業は、「とちぎ終章学総論」を来年度から試行的に始めます。年度毎に関連科目を徐々に展開していき、平成29年度には事業の完成モデルが実現できるようにしたいと考えています。

―最後に、この事業について、廣瀬先生から学生にぜひ伝えたいことをお願いします！

これからの大学生は、私たちの世代よりもより多くの高齢者とともに生活することを余儀なくされます。同時に急速な人口減少とそれに伴うコミュニティの衰退が大きな課題として職業生活や社会生活に人生設計に色濃く反映せざるをえません。「終章」という言葉は印象は良くないのかもしれませんが、誰もが直面する人生の最終章をどのように豊かに健康に生きていくのかという願いが込められた言葉です。学生のうちにこの人生の終章のさまざまな有り様について学ぶことは21世紀のリテラシーとしても意味があると考えています。超高齢社会、人生の終章期を学ぶことによって学生一人ひとりの人生をより豊かにしていくのです。

Welcome to 研究室&ゼミ

●研究室概要

「植物病理学研究室」では、安定した安全な食糧供給を目指して、農作物の病気の防除、特にウイルス病に関する研究を行っており、ウイルスの遺伝子解析や新しい検出法の開発、分子生物学的・遺伝子工学的手法による耐病性植物の解析・作出やワクチンウイルス（弱毒ウイルス）の開発などを行っています。

農学部　植物病理学研究室

●学生から

●僕たちの研究室は20人ほどで、日々ワイワイと実験に励んでいます。メンバーは皆個性的で優しく、また、先生方の知的なユーモアにより研究室ではいつも笑いが絶えません。

実験では失敗することもありますが、今まで何とかやってこられたのは、仲間がお互いに気にかけ、支え合う環境があるからだと思っています。

修士1年　半田　翔也

●研究成果を論文として発表できるとインターネットに論文が掲載され、いつまでも自分の名前が残り続ける！そして、世界の人たちが読んでくれる！これってなんだかワクワクしませんか？これも、研究の一つの面白さだと思います。

『少しでも、自分の名前を残したい！』そんな小さな野望を抱きながら、私は日々研究しています。

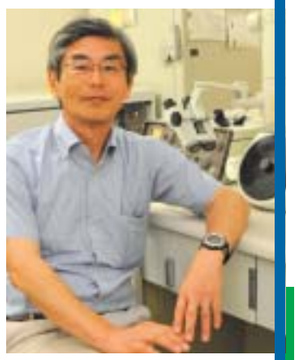
学部4年　益子　嵩章

●栃木市出身の私は祖父母がイチゴ農家だったため、幼い頃から身近なイチゴに興味を持ちイチゴに携わる研究がしたくこの研究室に入りました。

実際にイチゴを育てながら研究する日々は失敗もありますが、花が咲いて果実を実らせた時は我が子が生まれたかのように嬉しかったです。そんな私の好きな食べ物はもちろんイチゴです！！

学部4年　出井　沙織

●教員から



●人間と同じように、植物も病気にかかります。病気による農作物の減収はアメリカだけで1年間に1兆円以上で、ウイルス病による農作物の減収は日本だけで数百億円と試算されています。もし少しでも病害を減らせるならば、今後予想される爆発的人口増加による食糧問題の解決の一助となるでしょう。また最近では、無農薬や減農薬で病気を防除する方法の確立というエコ農法も求められています。

人間はウイルスに感染しないように予防接種をします。そこで、植物病理学研究室（略称：植病）では、安定した安全な食糧供給を目指して、農作物のウイルス病に関する研究を行い、なかでも植物ウイルスに対するワクチンの開発で大きな成果を上げています。

教授　夏秋　知英

●植病では、植物に病気を起こすウイルス（植物ウイルス）の研究をしています。例えば、ウイルスの遺伝子を解析することで病気を起こすメカニズムを明らかにしたり、病気の発生を防ぐための方法を開発したりしています。

最近はトマトの黄化葉巻病の防除法を確立しようと民間企業と共同で研究を行っています。黄化葉巻病は日本だけでなく世界中で大発生しているので、もし防除法が確立すれば世界規模での貢献ができるのではないかと期待していますが、そう簡単に物事は進まず、あれこれ悩みながら日々格闘しています。

その他、栃木県の特産品であるイチゴやビール麦なども扱っていますので、もし興味があれば我々と一緒に研究してみませんか？

准教授　西川　尚志

Welcome to 授業

●授業概要

世界や日本において、地球市民社会や国際NGOの役割が大きくなっています。「地球市民社会論」では、地球市民社会を取り上げ、その概念、特徴、起源と歴史、発展の流れ、先進国・途上国・日本の地球市民社会について論じ、地球市民社会の基礎と実践を理解することを目標としています。

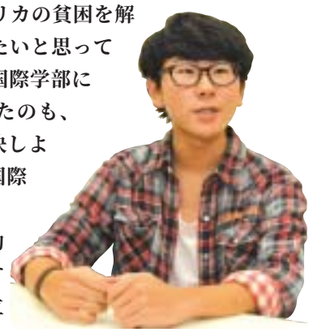
国際学部　地球市民社会論

●学生から

●将来、グローバルな視点で物事を考える仕事に就きたいと思っています。海外に出たとき、その国の文化や宗教の違いを理解していなければうまくやっていけませんし、国家（政府）間のレベルでは解決することが難しい問題を、市民レベルで理解、協力し合うことで解決していこうとする地球市民社会の考え方を持つことが必要だと思います。

この授業では、市民レベルで自分たちが何をすれば世界平和につながるのか、世界の貧困の問題を解決することができるのか、を考え学ぶことができます。

国際文化学科１年　高田　光紀



●私は、将来、アフリカの貧困を解決する活動に携わりたいと思っています。宇都宮大学国際学部に入学することを決めたのも、アフリカの貧困を解決しようとしている先生が国際学部にいるからです。

実際にNGOで活動したいと思っていますので、NGOの成り立ちや意義、役割などを学べるこの授業は、自分にぴったりの授業です。

重田先生の授業は他にも受けているのですが、重田先生自身、実際にNGOで活動した経験があって、その時の話が聞けて、とても参考になっています。自分にもできるかな、と思いながら勉強しています。

国際社会学科１年　大平　太

●教員から

●21世紀を生きている人類は、開発と環境破壊、人権の侵害、平和と戦争、宗教と文化対立といった地球規模の問題に直面しています。これらの問題を解決するために、いま、「地球市民社会」の役割が注目されています。

地球市民社会とは、発展途上国の現場へ人道支援や開発支援を行う国際NGOや市民団体などで、「共生のための世界を目指す市民社会」のことです。そして、「市民社会」とは、NGO・NPO、協同組合、大学など教育関係機関、社会福祉団体、市民運動団体など非政府・非営利セクターに入る団体です。政府（国家）＝第１セクター、企業（市場）＝第２セクターと並ぶ重要な第３のセクターになっています。

欧米に比べると日本の第３セクターの存在感は、まだまだ小さいですが、阪神淡路大震災、東日本大震災を機に、市民（社会）のボランティア活動、救済活動が活発に行われるようになり、政府や企業からも独立した市民社会、第３セクターの存在感は高まってきています。

この授業では、地球市民社会が地球規模の問題の解決を目指す重要な担い手であることを理解していただきたい。学生自らが、世界や日本の市民社会の構成員であることを認識し、将来、NGOやNPOを含めた市民社会を支える担い手になってもらいたいと考えています。

国際社会学科
教授　重田　康博

研究Keyword

いじめを取り巻く感情
ー「妬み」「恨み」「シャーデンフロイデ」ー

宇都宮大学 教育学部 准教授 澤田 匡人

宇都宮大学　教育学部　准教授　澤田 匡人

PROFILE
2003年、筑波大学大学院博士課程心理学研究科心理学専攻修了。04年、聖徳大学人文学部児童学科講師。05年、宇都宮大学教育学部講師。06年、「平成17年度 ベストティーチャー賞」受賞。07年、宇都宮大学教育学部准教授。09年、感情心理学研究第16巻優秀論文賞。10年、「平成21年度 ベストレクチャー賞」受賞。13年、「平成25年度 ベストレクチャー賞」受賞。専門分野：感情心理学

Lab laboratory

■いじめの傍観者は加害者と同罪なのか？

この夏、関西の大学生たちがTEDからライセンスを得て運営するイベント（TEDxKG）のスピーカーの一人として招かれ、「いじめを見守る人たち」というテーマで講演しました。「いじめの現場を目撃しながら止めようとしなかった傍観者は、加害者と同罪である」という主張があります。しかし、実際にいじめが起きているのを目の当たりにしながら何もできない状況はたくさんあるはず。傍観を余儀なくされるような人たちをすべて加害者扱いするのはいかがなものでしょうか。傍観者を一様に責めることは、いじめ問題の解決につながらない。

いじめは、「被害者」と「加害者」、いじめを助長する「観衆」、観衆よりもさらに距離がある「傍観者」という4層の構造として考えられます。被害者―加害者という二者の関係でいじめを捉えるには限界があります。

傍観者や観衆に注目することで、いじめの早期発見や解決の糸口がつかめるのではないか。いじめを取り巻く感情に焦点を当て、いじめのメカニズムに迫ろうと考えました。

■いじめに関与している人たちの感情を探る

私がこれまで研究対象として扱ってきた感情は、「妬み」「シャーデンフロイデ（schadenfreude）」、「恨み」です。シャーデンフロイデとはドイツ語で、誰かが不幸になったことをつい喜んでしまう感情を意味します。

いじめという複雑な現象を切り取る手法として質問紙を使った調査をメインに研究してきました。

例えば、「自分のテストの点数が上がってきたことをクラスメートに自慢している架空の人物がいる。インターネット上の掲示板に『自慢ばかりしていてウザったい』と悪口を書き込まれているのを見て、どんな気持ちになるか」を聞きます。「うれしい」と回答すれば、「ざまあみろ」ということでしょうし、「かわいそう」と回答すれば「同情する」ということです。ここでは、いじめ目撃時にどんな感情を経験するかを調べています。

また、「誰かの悪口がインターネット上の掲示板やサイトなどに書かれていたので、それを見て笑った」などの質問に対し、その有無を答えてもらいます。ここでは、「いじめ」という言葉を使わずにいじめに加担した経験があるかを聞いています。

例年、1000名を超える小中学生を対象に調査を行っていますが、「誰かを妬んでいると、その人が失敗すると喜びやすくなる」、つまり、シャーデンフロイデを経験しやすくなることがわかりました。また、前述のようなネット上ではなく教室におけるいじめ目撃時の感情といじめ加担に着目した研究では、①享楽的傍観者（喜ぶも、加担しない）②享楽的観衆（喜んで、加担する）③同情的傍観者（哀れんで、加担しない）④非同情的観衆（哀れまず、加担する）の4グループに分類され、1番多いのは同情的傍観者でした。

いじめに関与している人たちの感情を理解できれば、自覚を促していくことが可能でしょう。被害者に同情を感じている傍観者が「かわいそう」と思うだけではなく、いじめを抑制する行動に一歩踏み出す勇気を与えるような働きかけができるかもしれない。そこに、いじめを収束させる可能性があると信じています。

わかりやすい授業を心がける。近年は「非線形プレゼンテーション」を活用した授業も行う

ゼミの学生と。右から根本一明（教育学部内地留学生／さくら市立氏家中学校教諭）、加藤諒（教育学研究科修士2年）、澤田准教授、鈴木琴美（教育学部学校教育専攻4年）、川島哲史（教育学部総合人間形成課程4年）

■いじめ収束の一助となる研究を目指して

「妬み」の研究を始めたのは大学時代ですから、もう長い付き合いになります。どうして妬みを研究テーマに選んだのですか？とよく尋ねられるのですが、おそらくは小学校時代の体験が関係しているように思います。当時は太っていたこともあって、鉄棒の逆上がりなど運動がからきしダメでした。また、そんな自分と異なるみんなが仲良くしているのもうらやましかった。こうした感情を通じて、周りの人との違いを否応なく意識させられてきたように思います。

「自分は、そういうことがうまくできない。じゃあ、どういうふうに折り合いをつけていったらいいんだろう」「学校という限られた空間での人間関係が、人を羨んだり妬んだりする感情やいじめにどうつながっていくんだろう」という疑問が、いま取り組んでいる研究の根底にあるのかもしれません。

2013年度ベストレクチャー賞を受賞。快適な授業を提供するための配慮は欠かさず、服装や滑舌など細かいところにも気を配っている

「いじめ」の研究を始めたのは宇都宮大学に着任してからですが、現在は栃木県のいじめ防止推進事業にも携わっています。

しかし、誤解を恐れずに言えば、必ずしもいじめ根絶をめざして研究をしているわけではないのです。昔からいじめはありましたし、これからもいじめが全くない世界なんて想像できないからです。大人の世界にも、いたるところいじめは起きていますし、ネットでもいじめがはびこっているじゃないですか。どうして子どもたちだけにいじめゼロを強いるんでしょうか。

私たちは、なぜ、いじめられている人、苦しんでいる人たちに興味を引かれたり、ややもすれば不幸を助長したりするのか。その鍵を握っていると思しき妬みやシャーデンフロイデという感情のメカニズムを解明したい。誰がどこにアプローチしていけばいじめを収束させることができるのか。傍観を余儀なくされる人たちの思いを代弁しつつ、いじめを収束させていくような手法はないのか。そのヒントになるような研究成果を積み重ねていきたいのです。

My Campus Life

私の学生時代

悩みながら……

高校時代、芸術大学を目指し絵画教室に通っていた時期があった。大学で心理学を学ぶことになるのは、受験期の失恋が少なからず影響したように思う。何もやる気がしない、相当混乱している自分を知り、人の関係性や感情に興味を抱くようになった。そこに、小さい頃からあったネガティブな思いがリンクして漠然とながら心理学を志すようになっていた。

大学3年生のときに「妬み」をテーマに研究していこうと決め、卒論では、小中学生を対象にして妬みやすさを測定する尺度を作成した。自分にないものをもっている人を見て、何か「イラっとする」ような傾向を測定できたらおもしろい、というシンプルな発想からだった。

当時参加したグループエンカウンターにて。後列左から二番目が澤田准教授

大学院時代、いろいろなことに悩み過ぎて自分を見失ったとき、禅寺に1カ月ほどお世話になった。朝5時に起床し、座禅。昼は掃除や庭の雑草とりなどの雑用。夜、座禅をして夜11時に寝る毎日だった。印象的だったのが、老師（住職）が、風呂の足ふきマットや、配膳場所が少しでも違っているのをめざとく見つけ、ものすごく怒ったことだ。最初は理不尽だと感じた。やがて、礼儀作法ではないが、まず型にはめてからそれを守っていくということを大事にし、そこから外れたことに対して怒る老師の姿から、うまく表現できないが、「まず型にはまってから自由か不自由かを論じていけばいい。はまったことがないのに自由ばかり求めたところで、何もつかめない」、自由であることの苦しさや、不自由に内包された自由について漠然と考えたことを記憶している。

心に余裕ができたのだろうか、当時悩んでいた研究の進め方についても「とにかく、自分のやりたいことを試行錯誤しながらやっていくしかない」と割り切ることができた。今思えば、現在の教育・研究に対する姿勢にも通じる貴重な体験だった。

【取材・文：ビオス編集室】

＊TED（Technology Entertaiment Design）＝「広める価値のあるアイディア」の精神のもとに1984年、アメリカで結成された非営利団体。今では世界を変えるさまざまなアイディアを支える場として大きな役割を担う
TEDx＝TEDの精神である「広める価値のあるアイデア」を共有するために世界各地で生まれているコミュニティー
KG＝関西学院大学の略称

お買い物で世界を変えよう！

カケハシーズ〈KAKEHASEEDs〉

－地域で活動する学生たちを訪ねて－　Vol.6

学大生は今！

サークル名「カケハシーズ」は「KAKEHASHI（架け橋）」と「SEED（種）」の合成語である。「人々の架け橋をつくる種を蒔く」という思いから名づけられた。宇大のサークルとして十数年、国際協力NGO「シャプラニール＝市民による海外協力隊」の地域連絡会である「シャプラニールとちぎ架け橋の会」と協力して活動を続けてきた。

活動の柱となる「フェアトレード」とは、有機・無農薬栽培等の付加価値ある生産物を適性な価格で取引し、生産者に対してきちんと対価を支払う交易であり、生産者の自立を応援する活動である。産品を買うことで、貧困問題の解決や、伝統や文化、環境を守るということも併せて、経済的にも弱い立場のアジアの途上国を支援する国際的な運動である。

拠点であるサークル「カケハシーズ」代表の飯島彩さん（国際学部2年）に話を伺った。

「KAKEHASEEDs」カケハシーズ
代表　飯島彩（国際学部　国際文化学科2年）

―なぜ、カケハシーズに参加したのですか？

何か国際協力をしたかったんですね。国際協力というと「大きなこと」というイメージでした。ところがフェアトレードを知って考えが変わりました。日常の何気ない買い物の中でも国際協力はできる、自分でも国際協力ができるんだと。驚きましたね。先輩と後輩もとても仲良かったし、雰囲気のいいサークルに魅力を感じて参加しました。

―カケハシーズはどんな活動をしているの？

主に「シャプラニールとちぎ架け橋の会」の協力の下でフェアトレードによるアジアの国産品の販売と、フェアトレードを広めるための活動です。バングラデシュ、ネパールの手工芸品などを仕入れて販売しています。また、週1回、2時間のミーティングを毎週水曜日に行っています。1時間で事務的な話やイベントのことを、後の1時間で勉強会（ワークショップ、プレゼンテーションなど）をします。一人ひとり考えていることをプレゼンしますが、勉強会ではそれぞれ興味のあるテーマの他に、長期休みの後は旅行報告会なども行います。

―サークルは何人くらいのメンバーで活動しているの？

2年生5人、1年生11人、3年生はいま日本にいる学生が3人くらいです。国際学部の学生が多いので、3年生は交換留学などで日本を離れてしまいますが、帰国後応援してくれますね。

―アジアの産品の仕入れ方法は？

東京に本部があるNGO「シャプラニール」のカタログで仕入れます。メンバーで意見を出し合って、顧客に売れそうなものとか、地域や季節によっても売れるものが異なりますので、話し合ってその都度仕入れます。

―大学祭やイベントのとき以外に、普通のショップでも買えますか？

ご協力いただいているお店がありますので、普段でも買うことができます。商品を取扱ってくださる店舗が宇都宮市をはじめ県内にあります。「とちぎフェアトレード商品取扱店MAP」を年に1回発行し、現在4版を作るにあたり、商品を置いていただけるお店を開拓中です。ぜひ、サークルにご連絡ください。

合宿

グローバルセミナー

大学祭

フェスタMy宇都宮2013

フェアトレード商品

フェアトレードまつり2012

シャプラニール本部訪問

―地域活動を通しての社会人との繋がりはいかがですか？

NGOの社会人と一緒にイベントをやらせていただいてるので大いに勉強になっています。食品販売するための申請の出し方や、広告をいただくときの営業方法など、緊張しながら学んでいます。イベントは運営実行委員から企画、販売まで携わります。学内だけではなく学外で社会人とともに活動することは、とても意義があると思います。活動を通して、国際協力は仕事をしながらでも貢献することができることが分かりました。

―これから目指すことは？

フェアトレードを地域で日常的に推し進めるためにも「まちづくり」の運動と繋がりたいと考えています。フェアトレードは世界的な運動です。日本の認定機関「一般社団法人フェアトレードタウン・ジャパン」に、フェアトレードタウンとして宇都宮市が登録されることを目指しています。

＊「カケハシーズ」連絡先
http:// kakehasheeds.jimdo.com

◆フェアトレードまつり
11月9日（土）11：00～18：00
宇都宮バンバ広場（二荒山神社前）
フェアトレードマルシェ・フェアトレード展（学生のとりくみ「まちチョコ」コーナーなど）・エスニック料理店他
＊庄野真代ライブ（無料）
ライブ13:00～13:30／15:00～15:30
トークショー14:30～14:50
http://ftfes.jimdo.com
◆宇都宮大学「峰ヶ丘祭」
11月23日（土）24日（日）10:00～
バングラデシュ、ネパール手工芸品販売・模擬店・フリーマーケット

Meeting

「震災がれき大谷石の再利用による休憩所」が2013年度グッドデザイン賞を受賞

工学研究科安森亮雄研究室で設計・施工した「震災がれき大谷石の再利用による休憩所」が、このたび2013年度グッドデザイン賞(主催：公益財団法人日本デザイン振興会)を受賞しました。

本建物は、東日本大震災において発生したがれき大谷石約150本を引き取り、宇都宮大学陽東キャンパスに休憩所兼喫煙所を設計・施工したものです。デザインは、街中にある大谷石蔵の景観を引き継ぎつつ、人の居場所となる大きなベンチとして機能する「小さな蔵・大きな家具」をテーマとしました。震災の記憶を留めながら、大谷石の再利用方法を提示し、街なかの景観形成のプロトタイプとなることを意図しました。

設置場所：宇都宮大学陽東キャンパス
栃木県宇都宮市陽東7-1-2
＊グッドデザイン賞ウェブサイト
http://www.g-mark.org/award/describe/40388

グッドデザイン賞受賞の休憩所（正面写真）

東日本大震災による大谷石がれき

基盤英語教育プログラム「EPUU」が大学英語教育学会賞（実践賞）受賞

基盤教育センター・副センター長で、基盤教育英語プログラムEPUUのコーディネーターである江川美知子教授が、2013年度大学英語教育学会賞（実践賞）を受賞しました。「宇都宮大学における総合的多面的英語教育改革の企画・実施・評価に関する優れた貢献」が受賞理由で、「浴びる英語」をテーマに、実践的な英語運用能力の養成を目指して、学生が主体的・能動的に学べるような自立学修システムを構築したことが、高く評価されたものです。

第5回観光・まちづくり教育全国大会において奨励賞を受賞

附属小学校の八巻修教諭が「第5回観光・まちづくり教育全国大会（総務省後援：千葉大会：7月27日、千葉市ベイ幕張ホール）」において奨励賞を受賞しました。受賞対象となった授業は小学校3年生「宇都宮は伝統ゆかりの地 百人一首オリジナルCMを作ろう！」です。

八巻教諭は第3回には同大会会長賞、第4回には同審査員特別賞をそれぞれ受賞しており、ここ3年連続で入賞し活躍しています。

UUnow各号は**峰が丘地域貢献ファンド**の支援を受けて発行しています。
■賛同企業（五十音順）
（株）足利銀行／（株）井上総合印刷／宇都宮大学消費生活協同組合／烏山信用金庫／光陽電気工事（株）／（株）ＴＫＣ／（株）栃木銀行／ミニストップ（株）／その他金融機関／宇都宮大学国際学部同窓会
■峰が丘地域貢献ファンドホームページ
http://www.utsunomiya-u.ac.jp/found/index.html

「外国につながる子どもフォーラム2013」の開催

このフォーラムを開催する目的は、外国人児童生徒教育に関わっている関係者と大学研究者や大学生および地域住民の方々などのネットワーク構築の場を提供することです。
日時：2013年12月7日（土）13：00～17：00
場所：宇都宮大学　峰キャンパス　教育学部E棟2102教室
【プログラム】
総合司会　上原秀一（宇都宮大学教育学部准教授）
13：00　開会
13：10　第1部
「宇大生×Educare（つくば市ブラジル人学校）生徒
日伯ユースサミット2013～国際化する日本の光と影～」
14：20　第2部
「特別の教育課程による日本語指導の開始に向けて」
文部科学省初等中等教育局国際教育課による説明と質疑応答
15：40　第3部
「北関東における外国人児童生徒教育にどのように向き合うか」
司会：松本敏（宇都宮大学教育学部教授）
パネリスト：稲葉奈々子（茨城大学人文学部人文コミニュケーション学科准教授）、本堂晴生（いせさきNPO協議会 社会貢献ネット理事）、田巻松雄（宇都宮大学国際学部長、HANDSプロジェクト代表）、若林秀樹（宇都宮大学国際学部特任准教授）
16：50　閉会
問い合わせ先：国際学部附属多文化公共圏センター内
HANDSプロジェクト事務局
コーディネーター 船山千恵
TEL：028-649-5196
FAX：028-649-5228
参加無料

田中正造とアジア

日時：2013年12月8日（日）10：00～16：00
（9：30開場）
場所：栃木市藤岡遊水池会館
主催：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター
宇都宮大学国際学部
前日に、ゆかりがある場所を訪ねるスタディーツアーを行う予定です。
詳細は決定次第下記ホームページにてご案内します。
http://cmps.utsunomiya-u.ac.jp/
問い合わせ先：国際学部附属多文化公共圏センター
TEL：028-649-5228
E-mail：tabunka-c@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp
参加無料

第65回峰ヶ丘祭【学生主催】

日程：2013年11月23日（土）、24日（日）10：00～18：00
（24日は19：00まで）
会場：宇都宮大学峰キャンパス
学生の作品展や模擬店、豪華賞品が当たるビンゴ大会やスタンプラリーなど。23日はお笑いライブ、24日はクイズ大会、各団体ステージ発表、花火打ち上げなどを開催します。
問い合わせ先：宇都宮大学大学祭実行委員会
TEL：028-634-5877

第18回栃木県ダンスフェスティバル兼ダンス指導者研修会（宇都宮大学地域連携活動事業）開催

日時：2013年11月30日（土）12：30開場　13：00開演
会場：栃木県教育会館大ホール（宇都宮市駒生町1-1-6）
主催：宇都宮大学教育学部ダンス研究室
栃木県女子体育連盟
後援：栃木県教育委員会
栃木県市町村教育委員会連合会
栃木県高等学校体育連盟
栃木県中学校体育連盟
問い合わせ先：教育学部茅野研究室
TEL/FAX：028-649-5378
入場無料

第10回学生＆企業研究発表会

宇都宮大学のほか、県内大学の学生による地域の活性化につながる研究や、人間生活の向上や改善に関する研究成果の発表を通じ、地域における学と学との交流、並びに産学官交流を図ります。
主催：大学コンソーシアムとちぎ
学生＆企業研究発表会実行委員会
地域連携事業委員会
産学官連携サテライトオフィス事業委員会
日時：2013年12月7日（土）9：00～17：30
場所：宇都宮大学　陽東キャンパス　宇都宮市陽東7-1-2
問い合わせ先：産学官連携サテライトオフィス
TEL/FAX：028-667-0001
E-mail：sat@khaki.plala.or.jp
入場無料

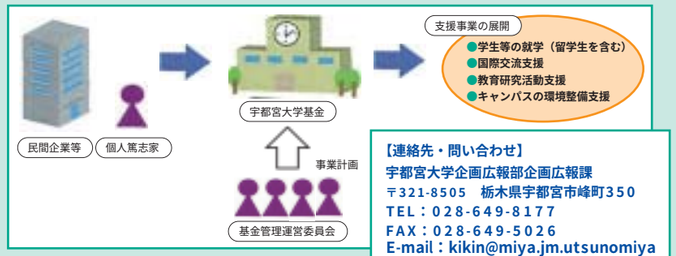
保育を語る会

「豊かな暮らしを創造する幼稚園の環境」
4・5歳児公開保育と保育研究会
日時：2014年2月1日（土）8：45～12：30
場所：教育学部附属幼稚園　参加費：200円（資料代）
問い合わせ先：教育学部附属幼稚園　TEL：028-622-9051

『宇都宮大学基金』へのご協力をお願いいたします　http://www.utsunomiya-u.ac.jp/kikin/index.html

宇都宮大学では質の高い教育研究の推進と地域貢献活動に強い大学であり続けるため「宇都宮大学基金」を創設しています。本基金の趣旨をご理解いただき、皆さまのあたたかいご支援、ご協力をお願いいたします。
ご協力いただける場合には、所定の振込用紙（右の連絡先までご請求ください。）にご記入いただき金融機関からお振り込みください。寄附金については本学の学生支援、国際交流、教育研究活動、キャンパスの環境整備等の充実に、有効に活用させていただきます。
今後とも本学の教育研究活動等に対し、格段のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

【宇都宮大学基金の仕組み】



【連絡先・問い合わせ】
宇都宮大学企画広報部企画広報課
〒321-8505　栃木県宇都宮市峰町350
TEL：028-649-8177
FAX：028-649-5026
E-mail：kikin@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

宇都宮大学峰キャンパス「日本式庭園」／Photo：Yusaku KIHARA

UU now 第32号

■企画・編集
宇都宮大学
UU now 第32号編集委員

■編集委員
今成 麻友　国際学部2年
丹野 裕太　国際学部3年
手塚 祐奈　教育学部2年
犬塚 靖顕　教育学部2年
福田 朋美　教育学部2年
山口 美南　教育学部2年
鈴木 祐介　教育学部2年
安納 優希　教育学部2年
築田 恵　教育学部2年
柴崎 拓也　教育学部3年
班目 穂波　教育学部3年
平井 星　教育学部3年
鎌田 恭穂　教育学部3年
石川 賢祐　教育学部4年
小野愛咲美　教育学部4年
松山 大介　工学部1年
鈴木 里佳　工学部1年
森園 祥江　工学部1年
内沢 絢子　工学部2年
渡邉 里奈　工学部2年
鬼塚希美子　農学部2年
成田 彩乃　農学部3年
大迫千恵子　農学部3年
渋沢 志穂　企画広報課職員
沼尾 建男　企画広報課職員
神戸 幸　企画広報課職員
手塚絵美子　企画広報課職員

■発行責任者
石田 朋靖　理事
企画・広報担当

■編集協力
栃木文化社・ビオス編集室

■企画広報課では、皆さまの声をお待ちしております。ご意見・ご要望などをお寄せください。
【宛先】宇都宮大学 企画広報課
〒321-8505
栃木県宇都宮市峰町350
TEL：028-649-8649
FAX：028-649-5026
E-mail：plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp